

分析理論講座 1巻

自己を知る

ラカン精神科学研究所

◇ も く じ ◇

自己を知るとは	P 1～2
無意識	P 2～3
無意識の定義	2
無意識のとらえ方	3
日常での無意識の表れ方	3
心の誕生	P 3～5
母子一体の赤ん坊	3
鏡像段階	4
母性	P 5～8
理想的母親像とは	5
母親が母親らしさを育てていく条件	6
子どもに必要な養育（マザーリング）	6
母性欠損による障害	7
母性的養育環境の欠如	7
自己愛	P 8～12
自己愛とは	8
健康な自己愛	8
親の愛の中の子どもの像	9
自己愛パーソナリティーとは	10
誇大自己	10
自己愛パーソナリティーの性格特徴	11
自己愛パーソナリティーの四型	11
自己—対象未分化な自己愛者	12
超自我	P 12～18
現実原則と快感原則	13
自我とエス	14
自我と超自我	15
自我構造	16

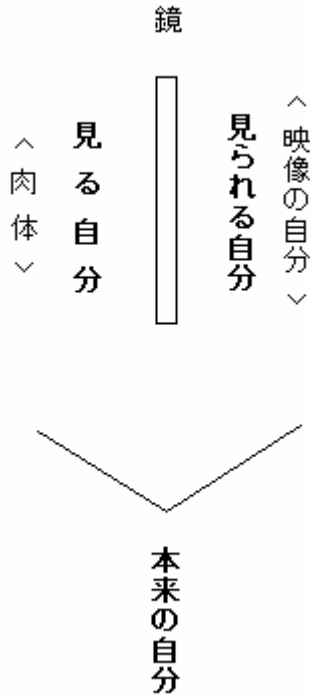
自我意識の発達	P18～19
発達・発展	18
自己意識形成の五要素	18
自己認識	19

自我形成・構造論	P19～23
自我の芽生え	19
意識とは？精神を照らし出す光である	19
愛と憎しみ	22
自我機能	23

自己を知るとは何か

人間と動物を分ける最も大きな違いは、自意識といわれている。自分で自分を見てうっとりできるのが人間で、動物は鏡に自分を映してうっとりしたり、話しかけることはしない。その違いこそ人と動物の違いである。

鏡を見ている人間を考えた場合、そこには鏡の中に映っている自分と、その自分を見ている鏡の外に自分がいる。すなわち「見る自分」と「見られる自分」がいて、その状態を見ているもう一人の自分がいる。もしその第三者の自分がいなければ、鏡の中の自分と外の自分を同一と考え、また別々だと認識することができない。



『自己』とは、この「見る自分」「見られる自分」「本来の自分」の三つの自分が統合されたものということができる。人間の悩みと葛藤はこの三つの自分のバランスが崩れたことによって生じる。「見られる自分」ばかり気にかけると、全てが気になり恐怖感から何もできなくなり、抑うつ状態になってしまうだろう。逆に「見る自分」ばかりであれば、他人のことは一向におかまいなしの傲慢でわがままな人間である。あるいは本来の自分が弱ければ、他人や抽象性に影響されやすく、妄想を抱く人間になってしまうだろう。

それぞれがバランスを保ちつつ生きていくのが理想である。その時々に応じて三つの自分のバランスをとっていくことが、対人関係をスムーズにし、心の安らぎをもたらすことになる。

自己を知ること、この三つの自分について正しく認識することである。しかし、事はそう簡単にはいかない。それぞれの自分は、意識されたり行動化された時にしか存在しないからである。そして一度にまた同時に三つの自分を意識化することができないからである。

それゆえ、意識され、行動化された自分以外の二つの自分は、いわゆる無意識状態にある。勢力的には意識よりはるかに大きく強力な存在である。なぜなら行動は一つでも、無意識下のその他の自分はほぼ無限といてもいい可能性としての意識をもったものだから。その可能性からたった一つの行動を選択したに過ぎないため、無意識下の自分は情動を伴って、強く大きく抑圧・圧縮、置き換えられて貯蔵せられたままになっている。

自己に気付くには、この三つの自分をそれぞれ生きてみて、数多くの試行錯誤のおいて気付き、修正されていくものである。

そして最も大事なことは、「本来の自分」に気付くことである。真に自分自身が望み、生きようとしていることが何なのかに気付くことが、人生に成功をもたらし、幸福を得ることである。

無意識

◆ 無意識の定義

無意識の定義は、フロイトによれば、主として抑圧されたものを容れる容器であるという。また、ラカン「無意識は言語のように構造化されている」という。

意識の背後にあってその出番を狙っていると考えた場合、それを「前意識」といい、さらにその背後にあって、全く日常意識されることないところに、一つの言語として記憶され、潜んでいるものを指す。

無意識とは、主体が気付いていない心的過程であり、意識によって把握されない或るもの「ソレ」としかいいようのないものである。ただ我々は「ソレ」の影のようなものを通して「ソレ」を推測しているにすぎない。無意識は意識された時点で「ソレ」は無意識でなくなるから、無意識下の状態そのまま「ソレ」を把握することは不可能である。しかし人間は「ソレ」の存在をそれとなく予感している。

ここに「ソレ」と気付かれたくない何かの力を想定させる。それが「抑圧」の概念であり、それが分析の場面で表れれば「抵抗」となる。